
舞い降りた魔王

hotimin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

舞い降りた魔王

【Nコード】

N4563D

【作者名】

hotimin

【あらすじ】

今から三百年前から本格的に魔邪神、魔神に対すべく人類の打開策が始まった。それは奴等に対抗する人材を育てあげること。そして一人の少年と一人の少女が出会う。彼等の行く末は如何に!?

プロローグ（前書き）

結構長いです。それでも宜しければどうぞ。

プロローグ

三百年前

「魔邪神及び魔神の討滅を目的に世界規模で政策を進める！！異議、異論等がある者は居ないか！」

「・・・それには有望な経歴のある人材を集める必要があります」

「その件に関しては既に我々の同士達が名乗り挙げています。更には魔法学校を我が国で開き、世界各地の子供を集め、いつの日か奴等を必ず滅ぼしてくれるわ！！」

それから三百年後

小さな島国の面積に匹敵ぐらいの巨大な地に魔法学校は存在していた。ただ何人いるのかすら未だ解らない魔王たる奴等を滅ぼす為だけに・・・ざつと見て生徒数は千人は悠にいるだろう。

そして今年も4月になった

。

「やったー合格つと！！」

「よっしゃー」等と歓声を沸き立てている奴等で一杯のようだ。落ち込んでいる者も決して少なくはない。

その中に1人の男が立っていた。髪色は黒で目元はきりつとしており、作られたような美少年だ。周りの生徒から声が掛かっているも振り返りもしない。彼は迷わず自席へと着々と歩を進めていた。

そして新入生歓迎会が始まった。全校生徒が集まり学年で今年優秀な生徒が挨拶を交わす場だ。

「まず新入生代表の言葉」

と魔法学の教師の一人が声を響かせる。それに応じて一人の新入生が壇上していた。一礼し、そして口を開く。

「お前達の魔術、体術は遊びに等しい。もっと力を精進させよ・・・以上。新入生代表アラク・ルシファート」

と言いつつ“そいつ”は代表者所定の位置に着いた。全校生徒が“一人”を睨めつけながら囁いていた。

「あの新入生、、生意気だな」

「糞っ！！気に入らねーな」等が囁かれていた。

それから上級生代表達が挨拶をし、新入生歓迎会は終わった。

教室では皆がアラクを見ている。口先だけか本物なのか知りたかったのである。そんな凍えた空気の中に教師が入ってきた。そして何事もなかったかの様に挨拶を交し、自らの自己紹介を言い終えた最後に一人一人の自己紹介が行われていく。

「佐々木夏美です。特技は簡単な“火炎撃呪文”です」

「おーもう呪文を会得したのか、先が楽しみだなー！！」

「はいっ！！」

と少し緊張気味で声は上がっていた。

・・・

「沖田準です。これと言って特技はありませんが、“移動呪文”が少しだけ使えます。例えば自身の半径3m以内の物を自分の手元に呼び寄せたりできます」

「今年は優秀だなー！！いや結構結構！！」

・・・

「ティア・ナリスです。まだ呪文は使えませんがこれから頑張っていきたいと思います」

・・・

と遂に・・・だが

「アラク・ルシファート」と名乗っただけだった。

そして初日の授業が始まった。

担任共々、馬鹿広い敷地にクラス一同三十人が足を踏み入れた。辺り一面、荒地となっている。

「ここは練習場だ。今日はお前達に実際呪文がどんな物なのか見て貰いたい・・・さてまず始めに佐々木が自己紹介の際に言った“火炎撃呪文”からやろうか！」

と言って間もなく担任の手の平にバスケットボールぐらいの球を瞬時に作り、少し誇らしげな表情を浮かべていた。

「これが“火炎撃呪文”の基本だ。粗方の呪文は力の大きさにより形が変化する。球、不死鳥、龍の順々になっている。その他にも可能だが在るがままがベストだと言う結論が出ているので素直に従うように！」

「先生えーでも衝撃波が奴等の中では最高呪文だと祖父から聞いた事があるんですが・・・」

「衝撃線は生身の人間での使い手は滅多に現れない。魔邪神や魔神の一撃必殺みたいな物だからな」

「他の呪文ないんすか!？」

「先にも言った通り、まだまだ未知の呪文も合わせ沢山あるから心配しなくていいぞ」

初日の授業はこうして終わった。

次の日から猛特訓が行われた。アラクは観察に徹しているようだ。

「アラク、もしお前出来るんだつたら皆に助力してくれないか、先生だけじゃ全員に個人指導するのはキツイものがある」

「・・・いいでしょう」

それから先生が1人の少女を連れてきた。

「ちよつとな何だかコツが全く掴めないようだから解りやすく教えてやって貰えないか」

「はい、・・・承知しました」

「え、あつティア・ナイリスですっ！！お願いしますっ！！」

少女は赤面を晒しながらアラクを見つめている。歳はアラクと同じ15〜16で黒髪に目はパツチリしており、身長はアラクの肩ぐらいの少女だ。入学当初から男子から目を付けられるハズだ。

「ふうーん、でさっぱりなわけ？」

「はいっ！」

先生は他生徒の所に言っておりアラク達の周りには人がいない。

アラクは考えた様子をしてティア・ナイルスの片手を唐突もなく手に取った。握られた少女はひやつ！と酷く驚いていた。

そして手を放す。

「もう一度やってみる」

「え、えっ！ハイッ！」

と少女は先程までとは比べきれない程、顔は赤くなっている。そして言われた通りに少女は頭の中でイメージをし、“手の平に火球を作った”

「あっ、できた・・・」

それは初めてにしては大き過ぎるものだった。先生がこちらに気が驚いた様子で駆け寄ってくる。

「おー凄いじゃないか！！もう作ったのか！」

「あ、いえ・・・はい」

少女は困惑気味に返答する。

「じゃ俺は自学に努めますね」

「おうアラク、助かったぞ。どうもなっ！..！」

「あ、あっありがとうございます！..！」

そして約束の一週間が過ぎようとしていた。「今日はお前等の努力の成果を試す。緊張せずにやってくれ！試験内容はあそこにある俵に火球をぶつけれたら合格！ぶつけられなかったら並び直した、では出席番号順に行ってくれ！！」

そしてクラス全員が問題なく一発合格を果たした。ただ一人を除いて・・・

「あれ！？この間は出来たはずなのに・・・何で!？」

「アラク！！アラクはいないか!？」

「はい、俺はここです。何か用ですか？」

「実はティア・ナイリスが火球を急に作れなくなっとな・・・何か原因は解らないか？」

「!？そんなはずは・・・一度身に付いた技巧は忘れないはずですが、何かの間違いではありませんか？」

「ティア・ナイリス、もう一度やってくれ」

「はい」

そして火球は出来ず手の平で弾ける様に飛び散った。
アラクは目を凝らしながら

「ちよつとティア・ナイリスをお借りします」

と言い残し二人はその場から離れた。

二人は馬鹿デカイ校舎の反対側まで行った。

そして立ち止まりアラクは少女へと視線を向ける。

「お前が火球を作れない原因は恐らく・・・」

「あれ、あの新入生じゃねえ!？」

「あいつだよ!!生意気なクソ餓鬼っ」

「ふふっ!ちよつとばかり痛い目あわそうぜ!!」

と言いつつ、アラクの言葉を遮った三人組の上級生がこちらに向かってやって来る。

「よぉー新入生いーお取り込み中かい!?ひゃっははははは」

アラクは睨みつけている。

「怖い怖いっ、そんなに睨まねーでくれよ。俺達はな生意気な態度のお前に喝を入れに来てやったんだよ!!有難くっけとりなっ!!」

一人がいきなり腕を振り上げアラクに向かって拳を振り落とした。

「きやつ!？」とアラクは瞬時に近くにいたティア・ナイリスを突き飛ばし、近くにあった適度な塊をした“廃棄物”を呪文により三人の顔面にめり込ませた。

「ぐああああっ!!」

と言い残し上級生は無様に気絶した。

「今のは!？」

と隣に尻餅をついている少女が訊いてきた。

「“移動呪文”の一種・・・ところで言い欠けていたことなんだが・・・お前が火球を使えない原因は恐らく・・・」

「何事だ〜!!！」

と走ってくる足音が聞こえる。

「逃げるぞっ」

と言い少女の足では間に合わない判断したのかアラクは少女を“お姫様だっこ”をして常人離れした走りでの場を逃げた。

教室までの帰り道、アラクは言うべき事を切り出した。

「お前が火球を使えない原因は恐らく何らかの呪文が掛っているからだ・・・」

「ふえっ!?!?誰が何のために!?!?’

「それはさっきの三人組の様な俺に対する当て付けだろう」

「何であたしに!?!?’

「それは俺への間接的な嫌がらせだ。その間柄にお前が入っただけの事だ・・・悪かったな」

「アクラ君が悪いわけじゃないし謝る必要ないよ」

「多分、必要あるな」と言いつつアラクとティアは教室に戻った。

教室にはクラス一同が二人の帰りを待っていた。

「おかえりーお二人さん!!」

「何してたのー!?ふふっ!」

と言われ、ティアは顔を真っ赤にして自室に直ぐさま座り、うつ向いていた。

「アラク、原因は解ったのか?」

「・・・原因は解りませんでした。もう大丈夫だと思います」

「そうかありがとな・・・それじゃ席に着いてくれ」

「はい」・・・!!?」

空が急に薄暗くなった。その暗雲と化した空が不自然な状態で裂け、誰かが宙に浮いていた。

クラスメート達は“何だあれ”と言い、悠長にも窓から顔を出している。

先生は心あたりがあるかの様に青ざめている。

暫くして放送が鳴った。

「魔神“バアーゴ”の奇襲です。先生方は直ぐにグラウンドの方に向かって下さい。生徒の皆さんは教室の方で待機をお願いします」
放送を聞き終えた担任は物凄い勢いで練習場に向かった。

クラスメート達はすこし怯えている様子だった。
アラクは眉を顰めながらその“魔神”バアーゴを見入っていた。

練習場では駆けつけた教師等によって必死の抵抗が繰り広げられていた。

「ぐあああああつ!!」

教師の一人が断末魔をあげて自身の血溜りに倒れた。その後もバアーゴの特殊な魔術の前に次々と断末魔をあげ倒れていく。仲間に回復呪文を掛けている者もいるが数が数だ。間に合わない。絶体絶命のピンチだ。

バアーゴは着々と校舎に歩み寄って行く。

そこに一人の少年が立ちはだかる。

クラスメートが窓から落ちそうな勢いで目を皿のようにしてその少年を見る。

アラク・ルシファートだ。

アラクは歩を止めた“魔神”バアーゴに歩み寄る。そして一定の間隔を開け、数分間か睨みつけた。

それに耐えきれず口を割ったのはバアーゴの方だった。

「主は誰だ!？」

その応答と言わんばかりにアラクは何処から出したのか、小さなアークセサリーらしき物をバアーゴに見せつけた。

それを見入ったバアーゴは驚愕の表情を浮かべて後退りし始めた。

「お前を討滅する」

アラクはそう言うとき地を蹴り一瞬にして間を詰めた。そして手に白い光が溢れていき、バアーゴの胸元に当てた。

バアーゴは何が行ったのかすら解らず、茫然と立ち尽くしている”ようだった”。

バアーゴは後方にバタツと言う音を立てて倒れた。自分が討滅されたと言う自覚もない様子で。

校舎を見上げるとクラスメートが先程同様、いやそれ以上の表情で目を皿の様にして啞然としている。

それはそうだろう。いくら優秀だと言っても教師等がいと簡単に殺られた“魔神”を瞬殺しているのだ。手慣れた手つきで。

しかしアラクは討滅した直後ちいっ！と誰にも確信できない校舎を背にした立ち位置で舌打ちをしていた。

そう。あれはバアーゴが“捨てた”体だったのだ。本体（力）には危機一髪の所で逃れられたようだ。

アラクは自身を確認するよつに両手を目線まで挙げる。

「やっぱりか・・・あれがないと・・・あの程度の奴を取り逃がしてしまうとは・・・あれさえあれば・・・“封魔玉”さえあれば」

“封魔玉”それは魔邪神及び魔神の強大な力を抑える為に作った人

類の切札として伝説の名を今も残しているものだ。

曾て人類は封魔玉を使い、二人の魔邪神の魔力を抑え、封印に至った。

奴等は並外れた力を持ち、魔界で長年と対立し、危険因子だと言う事から、多くの魔邪神、魔神、人間の犠牲の元、遂に封印された。その重要な位置にあった“封魔玉”は今、この学校にあると言う噂がたっている。

アラクはそれを狙っている。強大な力の詰まったそれを。

こうして学園生活は始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4563d/>

舞い降りた魔王

2011年1月6日14時54分発行